

SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2023 は会期：《スクリーン上映》2023 年 7 月 15 日（土）～7 月 23 日（日）《オンライン配信》2023 年 7 月 22 日（土）10：00～7 月 26 日（水）23：00 会場：SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザ 映像ホール、多目的ホールほか（埼玉県川口市）主催：埼玉県、川口市、SKIP シティ国際映画祭実行委員会で開催された。

2004 年から始まった SKIP シティ国際 D シネマ映画祭（主催：埼玉県、川口市ほか）は、国際コンペティション、国内コンペティション（長編部門、短編部門）を中心とした“若手映像クリエイターの登竜門”として毎年開催を重ね、これまでに『死刑にいたる病』の白石和彌監督、『浅田家！』の中野量太監督、『カメラを止めるな！』の上田慎一郎監督、『さがす』の片山慎三監督など、日本映画界のトップランナーとして活躍する監督や、新作を心待ちにされる監督たちが多数輩出してきた。

20 周年を迎える本年は、スクリーン上映とオンライン配信のハイブリッドで開催された。

6 月 14 日（水）、神楽座（東京・飯田橋）にて記者発表を行い、コンペティション部門ノミネート作品や特集上映をはじめとする全ラインナップを発表した。

今年の SKIP シティ国際 D シネマ映画祭は、映画祭 20 周年と川口市制施行 90 周年を記念して、埼玉県と川口市が共同製作した作品『隣の転校生』のオープニング上映（ワールド・プレミア）で幕を開けた。“コンペティション”には、過去最多の 1,246 本の応募作から厳選した 24 作品がノミネート！すべて国内初上映。

国際コンペティションには、102 の国・地域から応募された作品から厳選した 10 作品がノミネート。アゼルバイジャン、シリア、トルコといった日本ではあまり観ることのできない国の作品や、ヨーロッパ、南米そして日本など、世界各国の新鋭監督の力作が揃った珠玉のラインナップ！

審査委員長は、数々のヒット映画を手掛けてきた映画プロデューサーの豊島雅郎氏。映画祭期間中の最終審査を経て、グランプリほか各賞を決定した。

国内コンペティションでは、日本映画界の未来を担う若手映像クリエイターが果敢に表現の可能性に挑んだ、長編 6 作品、短



第 20 回 SKIP シティ国際 D シネマ映画祭、受賞監督及び代理人の方々（前列）。映画祭ディレクター、審査員長、審査委員、実行副会長、プロデューサーの方々（後列）

編 8 作品がノミネート。『チチを撮りに』で 2012 年の本映画祭長編部門監督賞と SKIP シティアワードを受賞し、その後『湯を沸かすほどの熱い愛』『浅田家！』などのヒット作を手掛け、今や日本映画になくはない存在となった中野量太監督が審査委員長として凱旋した。

さらに特別上映では、2019 年の本映画祭にノミネートされた真田幹也監督が人気マンガを実写化した『尾かしら付き。』をワールド・プレミアで上映。「SKIP シティ同窓会」と題した特集では、過去に本映画祭でノミネートや受賞を経験後、大きく飛躍し活躍する 5 人の監督（松本優作、まつむらしんご、中村真夕、片山慎三、中野量太）が凱旋！

最新作の上映と、これまでの歩みを振り返るトークイベントが開催された。

また「中国映画の新境地～KATSUBEN Selection～」では、ロカルノ国際映画祭で審査員特別賞を受賞した、チュウ・ジョンジョン監督初のフィクション長編映画『椒麻堂会』を日本初上映！

いずれの特集も、世界各国の若手監督を発掘・紹介してきた SKIP シティ国際 D シネマ映画祭ならではの特集です。

オープニング上映 『隣の転校生』

映画祭 20 周年・川口市制施行 90 周年記念作品のワールド・プレミアで幕開け！

映画祭の幕開けを飾るオープニング作品。今年は映画祭 20 周年と川口市制施行 90 周年を記念して、埼玉県と川口市が共同製作した『隣の転校生』をワールド・プレミアで上映します！ 大衆演劇の世界で生き



オープニング上映 『隣の転校生』 藤田直哉監督、出演の葉山さら、松藤史恩、高島礼子

る中学生の少年が、ひと月しか通えない学校でのさまざまな出会いと別れを通じて成長する姿を描く爽やかな友情ドラマ。短編『stay』が 2020 年の本映画祭国内コンペティション短編部門で優秀作品賞を受賞した藤田直哉監督の長編デビュー作品。

特別上映 『尾かしら付き。』ワールド・プレミア！監督：真田幹也

SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザの若手映像クリエイターの支援事業として、埼玉県がユニバーサルミュージックアーティストと共同製作した作品『尾かしら付き。』をワールド・プレミアで特別上映。『ミドリムシの夢』が 2019 年の本映画祭国内コンペティション長編部門にノミネートされた真田幹也監督が、佐原ミズの人気コミックを実写映画化。小西詠斗、大平采佳、佐



©Mizu Sahara/COAMIX ©2023 『Okashiratsuki』 movie



『エフラートゥン』監督ジュネイト・カラクシュ氏(右)VFXスーパーバイザー・アニメーション・のヤームル・カールタル・カラクシュ氏
野岳、武田梨奈、木村昴、新内真衣らフレッシュなキャストが織り成す、ちょっと不思議で心温まる物語。



『僕が見た夢』エルナン・オリヴェラ プロダクション・ディレクター(右) 審査委員明石直弓氏



観客賞受賞の『助産師たち』レア・フェネル監督(右)と審査員特別賞受賞の『シックス・ウィークス』編集担当アンナ・ヴァーキー氏のお二人オープンパーティーにて



でも、私たちは本当に日本が大好きなので、今日この作品が、日本の荣誉ある映画祭で、審査員特別賞を受賞した『シックス・ウィークス』(ハンガリー)ビデオメッセージ。ノエミ・ヴェロニカ・サコニー監督と主演のカタリーナ・ロマンさんは日本語で挨拶した。

国際コンペティション

今年の国際コンペティションは、102の国・地域から応募された、過去最多の1,041本から、厳正なる一次審査を経て10作品をノミネート。審査委員長には数々のヒット作を手掛けた映画プロデューサーの豊島雅郎さんが就任し、最終審査を経てグランプリをはじめとする各賞が決定された。

ノミネート作品

『バーヌ』(アゼルバイジャン・イタリア・フランス、イラン) 監督ターミナ・ラファエラ
第二次ナゴルノ・カラバフ紛争を背景に、息子の親権を巡って社会的権力を持つ夫と闘う女性を描くアゼルバイジャン作品

『エフラートゥン』(トルコ)監督ジュネイト・カラクシュ

盲目の女性と写真が趣味の男の恋をレトロな色彩で綴る、トルコ発の切ないラブロマンス

●監督賞

『僕が見た夢』(アルゼンチン・ウルグアイ)

監督パブロ・ソラルス

『家(うち)へ帰ろう』で2018年の本映画祭観客賞を受賞したパブロ・ソラルス監督の最新作

『イントゥ・ジ・アイス』(デンマーク・ドイツ)

監督: ラース・オステンフェルト

気候変動の問題を読み解くため、グリーンランドの氷河を調査する3人の科学者を追ったドキュメンタリー

『あなたを探し求めて』(イギリス)監督エラ・グレンディング

SNSを通じて、自分と同じ障害のある人を探す監督自身の6年間に及ぶ旅路を記録した圧巻のセルフ・ドキュメンタリー

『ジェイルバード』(イタリア・ウクライナ)

監督: アンドレア・マニャーニ

四人の両親の下に生まれ、刑務所内で育った青年と看守の男の深い愛情を描くハートフルコメディ

●観客賞

『助産師たち』(フランス) 監督レア・フェ

ネル念願叶って“世界で最も美しい仕事”とされる職業に就いた新米助産師たちの奮闘と葛藤のドラマ

『マイマザーズアイズ』(日本)『写真の女』で2020年の本映画祭 SKIP シティアワードを受賞した新鋭・**串田壮史**監督が新たに仕掛けるサイコサスペンス

●審査員特別賞

『シックス・ウィークス』(ハンガリー) 監督ノエミ・ヴェロニカ・サコニー

高校生の少女が、養子に出したわが子を取り戻せる猶予の6週間に体験する激しい心情の揺らぎを映し出すヒューマンドラマ

●最優秀作品賞(グランプリ)

『この苗が育つ頃に』(シリア) レーゲル・アサド・カヤ監督



驚異の“無交換式オイル劣化予防装置”
PECS MARK-IV



タイ王国でのPECSの製造・販売は
国連のCTCNに助成事業として
認定されました(CTCN=気候技術センター・ネットワーク)

オイル寿命が延命!

森林伐採を助長する、ろ紙不使用

ユーザーメリット大!環境負荷の大きな軽減!

長期にわたる良好なエンジンコンディションの維持!

20万kmごとに1度のメンテナンスで継続使用可能

PREVIA(エスティマの左ハンドル車) 新車時にPECSを装着し、その後1万km 毎に交換して8万km 走行時、オイルの汚れたまま排ガスを測定した結果、CO, HC, NOx とPM2.5 の大幅な削減によりEuro 6 をクリア!

開発製造元 総発売元

株式会社 ターゲンテックス

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山5-1-13
Tel.03-3326-7081 Fax.03-5313-2430

<http://www.tagen-tecs.co.jp/>



紛争の爪痕が残るシリアの村で暮らすヨーグルト売りの父娘と、迷子の少年の1日を描く感動作

戦争や気候変動、社会的抑圧がもたらす問題に向き合った作品や、親子の関係や生命の誕生、あるいはアイデンティティといった人間の根源に迫る、バラエティ豊かな力強い作品が揃いました。全作品、日本初上映となった。

国内コンペティション(長編部門、短編部門)

長編 6 作品、短編 8 作品がノミネート。

審査委員長：中野量太監督

● SKIP シティアワード・最優秀作品賞

『地球星人(エイリアン)は空想する』

監督松本佳樹

『UFOのまち』石川県羽咋市を舞台に、UFO 遭遇情報の真相を追う記者が迷宮に嵌っていくミステリー

● 観客賞

『ヒエロファニー』

静かに静かに常軌を逸していく臨床心理士の女性の日常から、救済の本質を問う哲学系ホラー。マキタカズオミ監督は、短編映画で2013年、2015年、2019年と本映画祭に過去3回ノミネート。

『縋い合う・こと』

父の仕事を継いだ兄と、根無し草のような弟の心のほころびを描く、俳優・長屋和彰の初監督作品

『十年とちょっと+1日』監督：中田森也

地元を離れた3人の男女が十年ぶりに再会したことで始まる風変わりな会話劇

『ブルーを笑えるその日まで』

学校に馴染めない少女が体験する、不思議なひと夏のファンタジー。武田かりん監督は2020年に短編でノミネート。初長編作品で再びコンペティションに参加。

『泡沫』監督：アドリアン・ラコステ

有名建築家の家に生まれた青年の内に秘めた苦しみと慟哭を美しい白黒映像で魅せる異色作

国内コンペティション短編部門には、8 作品がノミネート!

『恵子さんと私』監督：山本裕里子

ヒト型AIが一般化した日本で、AIと人間の心の関わりを描くSF作品

『野ざらされる人生へ』監督：永里健太郎

芽ええない男が想定外の展開に空回りする悲哀に満ちた大渋滞コメディ

『A nu / ア・ニュ ありのままに』監督：



「この苗が育つ頃に」を監督しました。まず初めに、日本のSKIPシティ映画祭で、最優秀作品賞を受賞したこと、たいへん嬉しく思います。映画祭の皆さんにお礼を申し上げます。また、日本の人々、素晴らしい観客の皆さんに感謝いたします。このような名誉ある賞をいただき、たいへん光栄です。シリアのクルディスタン地域ロジャヴァのコミュニティで、制作された戦争の物語が日本に届きました。私たちにとって、最高の喜びです。カメラと物語を通して、私たちの声を世界に届けようとしています。自由で平等な世界を手に入れようと思っています。この思いと目的のために、この賞を、戦争が終わった時の素晴らしい日に捧げたいと思います。また、自由と平等のために闘っている人々に捧げます。そして、戦争で命を失った世界中の子どもたちにも捧げたいです。このような賞をいただき、本当にありがとうございます。映画祭で、皆さんと私たちの思いを共有できたことを嬉しく思います。クルディスタン、シリアから、私たちの声を日本に送ることができました。受賞に関わらず、私たちにとってこれが最も大切なことです。あらためまして、映画祭の方々、そして観客の皆さん、日本の人々に感謝を申し上げます。シリアのクルディスタン地域ロジャヴァより、日本の皆さんに思いと愛を送ります。本当にありがとうございました。さようなら。



大野 元裕 (実行委員会会長 / 埼玉県知事)

古賀啓晴

ホワイトデーの思い出を瑞々しいタッチで綴るアニメーション

● スペシャル・メンション

『ミミック』監督：高濱章裕

宝くじを当てて不意に大金を手に入れたホームレスの男の葛藤を描く社会派ドラマ

『さまよえ記憶』監督：野口雄大

行方不明の息子を探す母親が、手掛かりを得るために自身の大切な記憶を差し出す、切ない物語

● 最優秀作品賞

『獺果』監督：池本陽海

狩猟に出かけたある夫婦のやり取りを通して、家父長制の有害さにユーモアとスリルで切り込む意欲作

『寓』俳優・石原理衣と音楽家・小野川浩幸が共同監督したダーク・ファンタジー

● 観客賞

『勝手に死ぬな』監督：天野大地

急逝した父の秘密を確かめるべく、父の記



奥ノ木 信夫 (実行委員会副会長 / 川口市長)

憶に潜入する家族のロードムービー

● 大野 元裕 (実行委員会会長 / 埼玉県知事)

世界初のデジタルシネマ映画祭として始まった「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」が記念すべき20周年を迎えることとなりました。昨年に引き続きスクリーン上映とともにオンライン配信も行うハイブリッド方式で開催します。今回、コンペティションには102の国と地域から過去最多の1,246作品の応募をいただきました。コロナ禍で十分に創作活動ができなかった若手クリエイターの情熱と共に、手塩にかけて作り上げた作品を初めて披露する舞台として、本映画祭に大きな期待が寄せられていることの証だと考えています。また2020年に短編部門優秀作品賞を受賞された本映画祭出身監督の藤田直哉さんが監督をして、映画祭20周年と川口市制施行90周年を記念し川口市と埼玉県が共同で製作した『険

※コメントは、記者発表のもの。写真は、オープニングセレモニー、クロージングセレモニー



八木 信忠 (映画祭総合プロデューサー)

の転校生』という作品がオープニングを飾ります。ほかにも過去のノミネート監督の最新作を上映し、それぞれの監督から本映画祭への思いや参加後の歩みなどを語っていただく特集なども企画しています。本映画祭の20周年を益々盛り上げていただければ幸いです。

●奥ノ木 信夫 (実行委員会副会長/川口市長)

埼玉県知事も私も川口の出身で、本映画祭を開催させていただくこと、そして今年で開催20周年という節目を迎えますことを心から感謝申し上げます。川口市制施行90周年という本市にとっても記念の年であり、埼玉県と共同でオープニング作品を製作させていただきました。川口市立高等学校をはじめとする市内各所で撮影されているほか、川口市立高等学校附属中学校の生徒や市民によるエキストラもご協力いただきました。私が会長を務める「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭を応援する市民の会」においても皆さんにご協力いただき、市をあげて映画祭を応援しています。開催期間中はJR川口駅西口からSKIPシティへの無料バスも運行するので、ぜひ大きなスクリーンでお楽しみください。

●八木 信忠 (映画祭総合プロデューサー)

今年で20回目ということで、思い返すと随分と苦勞をしたものです。映写機が今ほど良くなく、4Kなんてものも全く無い、1125本の走査線によるいわゆるハイビジョンが出来上がり、デジタルシネマという形がぼつぼつと出来上がってきた頃。国際規格の基準の明るさで写せるのかどうか、不安も多かったのです。映画といえばまだ「フィルム」という時代に、映画祭のネーミングにデジタルを意味する「D」を付けました。それでも応募にフィルムが送られてきて返送に手間取ったりと、色々ありましたが、今やデジタルは当たり前で、時の流れは速いなど実感します。今年も良質な作品が集まっていますので、宜しくお願い



明石直弓審査委員、豊島 雅郎 (国際コンペティション審査委員長、パトリス・ネザン審査委員) 致します。

●豊島 雅郎 (国際コンペティション審査委員長/アスミック・エース株式会社取締役、映画プロデューサー)

私はアスミック・エースという会社に所属しており、2018年に上田慎一郎監督の『カメラを止めるな!』、2019年に中野量太監督の『長いお別れ』、2022年に片山慎三監督の『さがす』など制作・配給で携わり、そんなことからSKIPシティ国際Dシネマ映画祭出身監督に縁が深く審査委員長を拝命いたしました。

この映画祭は、普段では公開されないような作品や、さまざまな国の監督たちが集まり、皆で作品を観る非常にアットホームな雰囲気の影響です。20年という積み重ねられた歴史と、世界に先駆けデジタルシネマを打ち出したという、そのご尽力に頭が下がる思いです。昨日の日本記者クラブでの会見で田中泯さんは「作り手が消費者におもねるだけでなく、芸術・文化としての質を向上するものを作っていかなければ駄目じゃないか」というような刺激的な発言をされましたが、わたしもその発言に感銘を受け、その通りだと思いました。本映画祭もそういった志を持った、世界に誇れる、世界に発信できる質の高い映画祭だと思えます。

●中野 量太 (国内コンペティション審査委員長/映画監督(『浅田家!』『湯を沸かすほどの熱い愛』))

2012年に『チチを撮りに』で本映画祭の監督賞をいただき、そこから全てが繋がって現在の位置を切り開いていただいていると思っています。「これでダメだったらもう止めよう」、それくらいの想いで40歳手前くらいになって応募したのが本映画祭でした。藁をも掴むような思いで、どうか見つけてくれと、そんな気持ちを今でも鮮明に覚えています。だから応募される方々の気持ちが痛いほど分かります。と同時に、プロの



中野 量太 (国内コンペティション審査委員長)



土川 勉 (映画祭ディレクター)

壁を超えるために何が足りないのか、ということも分かります。その才能を伸ばしたいからこそ、映画祭の一番の役割は褒めることだと思うんです。僕の自主映画も褒めてもらって何とか頑張れた気がします。僕にしかならないアドバイスが出来れば良いなと思っています。新しい才能に出逢うことを楽しみにしています。

●土川 勉 (映画祭ディレクター)

今年の映画祭の特色は、過去本映画祭にノミネートした監督たちが応募資格範囲内で再度、応募してくれたことがあげられます。海外からも2018年に『ザ・ラスト・スツ』で観客賞を受賞したアルゼンチンのパブロ・ソラルス監督の作品が再度ノミネートされました。国内作品も日本初上映というハードルがあるにもかかわらず、ご応募いただき多数ノミネートされました。

日本映画テレビ技術協会 名誉会員

中山秀一氏逝去

日本映画テレビ技術協会名誉会員中山秀一氏が2023年6月4日、肺炎のため逝去されました。90歳。テレビ局にてフィルムカメラマンとして活躍されました。

執筆活動に重きを置き、弊誌月刊FDIでも、創刊以来レベカメラや映画に関するご寄稿いただきました。特にSKIPシティ国際Dシネマ映画祭のレポートは、2020年まで、全ての作品を観て、レポートされておりました。生前、弊誌に寄せられた氏のご厚意に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。